

中国福建・広東省海外神社跡地を訪ねて

——汕頭神社、廈門神社、福州神社について——

渡邊奈津子

はじめに

海外神社の研究は1990年代以降、旧朝鮮や旧台湾、旧満州、旧樺太など各地域毎に詳しい研究が積み重ねられてきたが、こと旧中華民国についてはいわず研究の空白地域となっている。管見の限り、中島三千男「戦前期・中華民国における海外神社の創立について」⁽¹⁾があるだけである。

他方、海外神社跡地の研究は台湾での研究や日本における神奈川大学21世紀COEプログラムでの海外神社班による調査、及びそれを引き継いだ神奈川大学非文字資料研究センターの海外神社班の調査により、ようやく全体像がおぼろげながら明らかにされつつある。⁽²⁾

これまで、神奈川大学による旧中華民国の海外神社跡地の調査は、北京、天津、青島、台東鎮、上海、南京、靖垂、厚和、包頭、徐州、新郷の11社にのぼる⁽³⁾。佐藤弘毅の研究によれば、旧中華民国には1942年6月段階で51社が建てられたことになっているので、これをもとにすると跡地調査のできた神社は2割ということになる。

今回、中島三千男（神奈川大学非文字資料研究センター研究員）、馬興国（神奈川大学特別招聘教授）、渡邊奈津子（神奈川大学非文字資料研究センター研究協力者）の3名で、汕頭神社、廈門神社、福州神社の調査を行った（図1）。この3つの神社は、これまで未調査で、当時の写真や資料も収集できておらず、したがって、本研究班により作成・公開されているデータベースにも掲載されていない⁽⁵⁾。しかも、この3つの神社は地理的に旧中華民国の南部に建てられた神社であるというだけでなく（南部にはこの他に広東、香港の2社があるのみで、北部に



図1 汕頭市、廈門市、福州市、台湾位置関係図（Google Map）

比べると非常に少ない)、もう一つ大きな特色を持っていた。それは祭神の一つに北白川宮能久親王が祀られているということである。旧中華民国に建てられた全51社の中で、祭神としては天照大神や明治天皇が多いのであるが、北白川宮能久親王が祀られているのはこの3社だけである⁽⁶⁾。

北白川宮能久親王は、日清戦争後、下関条約で日本に割譲された台湾を「鎮定」のために近衛師団長として派遣されたが、「鎮定」直後、台南の地でマラリアに罹り死没した。皇族としては初めての対外戦争での戦死者で、「台湾鎮定」の英雄とされ、総鎮守として建てられた台湾神社をはじめ、旧台湾に建てられた68神社中60社（約9割）で、この北白川宮能久親王が祭神に加えられている⁽⁷⁾。

旧中華民国に建てられた神社中、なぜこの3社だけに北白川宮能久親王が祀られているのか、個々の神社の創立の経緯を明らかにできていないので、正確なところは不明である。ただ、この福州や廈門、また汕頭という地域が、台湾の対岸として台湾との関係が深く、したがって例えば日清戦争後、1898年に欧米列強は中国に相次いで租界を設定したが、こ

うした中で日本も同年4月に清国に対して交換公文で福建省のいかなる土地も他国に与えたり貸したりしないという、不割譲の要求を認めさせたり、また1915年の「対華21カ条」要求の第5号第6項で「福建省に於ける鉄道、鉱山、港湾の設備（造船所を含む）に関し、外国資本を要する場合には先ず日本に協議すべきこと」を中華民国に突き付けたように、早くから台湾の防衛や台湾から大陸進出への足掛かりの地として重要視されていたことに関係しているのかも知れない。事実、そうした関係を反映して、この3都市の1937年4月1日段階の「在留「日本人」の構成」を見ると、廈門が全部で7,150人、うち内地人は203人、台湾人は6,906人（台湾人比率96%）となっている。また福州は全体で1,999人、うち内地人は315人、台湾人は1,684人（同84%）、汕頭は全体609人、うち内地人128人、台湾人480人（同78%）と、台湾人の比率が中国主要都市の中で図抜けて高い地域であった（因みに4番目に台湾人の比率が高いのは広州で19%である）。いや、こういう事実をあげるまでもなく、もともと台湾の漢人は、福建、広東出身が多いことは周知の事実である。いずれにしろ、この点の解明は今後の課題である。

さて、以上の事を押さえたうえで、具体的に3つの神社跡地について見ていこう。

跡地の調査は、事前調査の結果をもとに現地を確認して行った。事前調査の方法を提示しておく、まず神社の建てられた場所の戦前の住所については、3社とも『神道史大辞典』の「終戦前の海外神社一覧」⁽⁹⁾により知ることができた。次に、戦前の地図で場所を確認後、現在の地図と照合し、所在地を現在の地図上で特定する。他に、インターネット検索でも情報を集めた。

以下、調査を行った順に結果を報告する。

一 汕頭神社

(調査日：2013年8月20日)

1 事前調査

汕頭神社は、1941（昭和16）年11月3日に設立を許可され、昭憲皇太后、大国魂神、大己貴命、少彦名命、能久親王を祭神とする。当時の所在地は「広東省澄海県汕頭市外馬路」となっていた。

『神道史大辞典』から得た情報をもとに、現在の場所を特定しようとしたが、神社の場所が分かる戦前の地図を見つけることができなかった。そこで、インターネット検索により調査を進めたところ、尋找旧汕頭「歴史急待拯救——“汕頭神社”的最后遺存！」、樛條「沈黙中的消失。」という二つのブログの記事において神社跡地が紹介されていることが分かった⁽¹⁰⁾。これらの記事は、いずれも2009年に公開されており、記事によれば「旧図書館」の裏に神社の遺構である狛犬が置かれていて、「旧図書館」は現在「汕頭市非物質文化遺産保護センター」になっているということであった。また、「歴史急待拯救——“汕頭神社”的最后遺存！」には狛犬の写真が掲載されていた。他に、陳伝忠編『汕頭旧影』という写真集にも汕頭神社と思われる古写真が掲載されていることも確認できた⁽¹¹⁾。

そこで、汕頭市内にある「汕頭市非物質文化遺産保護センター」を、「Google Map」で検索した地図を手掛かりに調査を行った（図2）。

2 汕頭市の概要

汕頭神社が建てられた汕頭市は、広東省東部、潮



図2 汕頭市非物質文化遺産保護センター地図 (Google Map)

汕平原の沿海部に位置する「スワトウ刺繍」が有名な都市である。西と南は揭陽市、北は潮州市に接し、東は南シナ海で、北は桑浦山、長得竜山、竜坑山、香炉山といった山がある。

古くから漁村が形成され、1563年、潮州府に澄海県が設置された際、これに帰属したが、第二次アヘン戦争を経て潮州港の治安が悪化すると、1860年に代替港として対外開港される。海外には「Swatow」として知られるようになり、以後、広東省東部の玄関口として発展した。1921年に澄海と分けられたのち、1930年に市制が施行された。多くの華僑を輩出し、海外との交流が密接である。

日本軍は1939（昭和14）年6月に占領している。

3 現地調査の結果

調査初日の8月19日、厦門空港にて全メンバー合流後、長距離バスで汕頭市へ向かった。翌8月20日朝、宿泊先を出発し、「汕頭市非物質文化遺産保護センター」を探し求めた。

センターは「汕頭市文化館 汕頭市非物質文化遺産保護センター」といい（写真1）、現在の住所は「汕頭市外馬路149号」⁽¹²⁾で、両側と裏側を高い建物に囲まれていた。敷地の奥へ進むと文化館建物の裏側にある住宅の前にブログに掲載されたものと同じ、一体の狛犬があった（写真2）。

その時間偶然にも在館されていた文化館館長である庄慶生氏、主任の李湘雄氏にお話を伺うことができ、以前この場所に日本の神社が建てられていたことを確認、写真1でも確認できる敷地内の石畳は神



写真1 汕頭市文化館



写真2 汕頭市文化館裏手にあった狛犬

社があった当時のもので、狛犬一体を残し、遺構は埋められたということが分かった。

そこでいただいた文化館の館報⁽¹³⁾に掲載された記事には、出発前のあるサイトにて確認した汕頭神社と思われる写真と同じものが掲載されていた（写真3）⁽¹⁴⁾。

記事やブログによれば、神社はドイツ領事館があったその場所に、1939年6月21日に日本が汕頭に進出したのち、1941年11月3日に落成したとある。戦後、1955年に汕頭市図書館となり、この図書館は文化大革命前に別の場所へ移動、文革期は「汕頭市革委会」が廃墟となった社務所に入った。文革後、新しい図書館の建設が計画され、1981年に完成したとき、神社の遺構は新しい図書館の背面に遺されていたが、1982年、図書館の拡張に伴い神社の建物は取り壊されることになった。建物跡地には子どもの読書室が建てられ、灯籠など遺構はそのとき地中に埋められたようである。2006年に図書館が新しい別の建物へ移動した後は、「旧図書館」「汕頭市文化館」となり現在に至っている。



写真3 汕頭神社（文化館館報掲載）

二 厦門神社

(調査日：2013年8月20日、21日)

1 事前調査

厦門神社は、1940（昭和15）年11月2日に設立を許可され、天照大神、明治天皇、能久親王、大國魂神を祭神とした。所在地は「厦門蓼花溪美山頂」となっている。

汕頭神社と同様に、まず戦前の地図を確認したところ、厦門市内で「蓼花溪尾」山なるものを見つけた（図3）。続いて現在の航空写真及び地図を見ると、「蓼花路」は確認できたものの、景観は大きく変わっているようだった（図4）。

厦門神社については、インターネット上でも触れられた記事を確認できず、結局これ以上の情報を得られないまま現地調査を行った。

2 厦門市の概要

厦門市は、19世紀から「アモイ (Amoy)」の名で国際的に知られていた。福建省南部に位置する都市



図3 1938年の厦門市地図。○で囲んだところに「蓼花溪尾」の文字が見え、山に面している

で、福建省南部の九竜江河口付近に位置し、厦門島や鼓浪嶼などの島嶼部が含まれる。現在は金門島、小金門島などは中華民国（台湾）の実効支配下であり、台湾海峡を隔てて台湾に臨む。「華僑のふるさと」の街として知られ、中華人民共和国の5大経済特区の一つである。

1387年、厦門城が築かれ、これが「厦門」という地名の初出とされる。1650年、鄭成功が厦門を本拠地とし思明州と命名、反清活動を行うも、1680年、この地を占領した清朝により廃止される。1684年、対外貿易が再開されると、東南アジア貿易の拠点として繁栄し、台湾の開発に伴い台湾との貿易も増大した。アヘン戦争にて1841年、イギリス軍に占領され、翌年の南京条約により外国人に対して開港した後、海外に知られるようになる。1862年にイギリス租界が、1902年に鼓浪嶼に共同租界が設置され、外国商社の商館が進出していった。1935年、市制が施行されたが、1938年5月には日本海軍が占領、1940年3月の汪兆銘政権成立後は厦門特別市が成立している。厦門神社創立はまさにその時期ということになる。

3 現地調査の結果

厦門神社の調査は8月20日、先述の汕頭神社調査終了後、再び行きと同様に長距離バスで厦門へ向かい、ほぼその足で神社跡地と見られる辺りで始めた。

まず、「蓼花路」を探し、周辺を歩き調べた。付近は木々が豊富な高台で坂が多く、「山」と呼ばれたことがある過去を想像し得る環境だった。集合住



図4 厦門市思明区蓼花路辺り地図 (Google Map)

宅地に居られた、ここに長く住んでいるという老人に「蓼花溪美山」のことを尋ねたが、「知らない」とのことであった(写真4)。遺構らしき箇所もあったが、日が落ちてきてしまい、その日は断念した。

翌日、中島と渡邊が金門島にて調査中に、馬が「蓼花路」辺の再調査を行い、狛犬をはじめ神社跡地と考えられる要素を発見した。中島、渡邊も合流した後、厦門賓館近くの駐車場への出入り口に一对の狛犬、その台座に刻まれている「奉献」の文字が削られていることを確認した(写真6、7)。

厦門賓館は高台に建っており、また周囲には巨大な石がいくつも存在し、まさに「岩座」として、この地は神社跡地としてふさわしい立地であった(写真8、9)。現在、厦門神社跡地と考えられる辺りには厦門賓館、タイ駐厦門総領事館が建っている。その駐車場は神社があった当時境内であったかもしれない(写真10)。しかしながら、狛犬の基石がまるで組み直されたかのようにバラバラとずれているこ



写真6 狛犬



写真7 狛犬の基石。削られた跡か、うっすらと「奉献」の文字が見える



写真4 蓼花路边

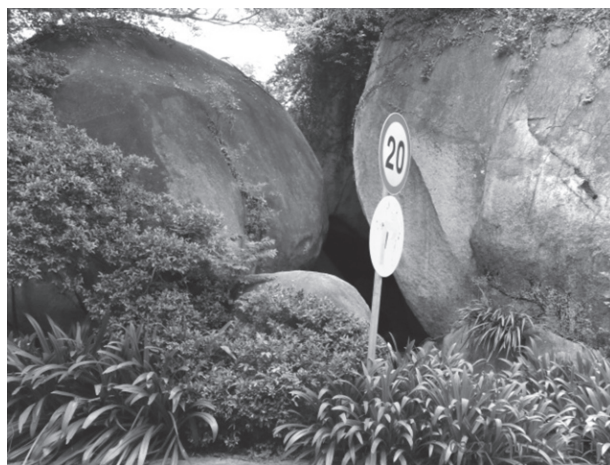


写真8 巨大な石



写真5 蓼花路边集合住宅地

とから、もとあった場所から移動された可能性も考えられ、この駐車場がそのまま厦門神社の跡地であるかどうかは慎重に検討してみる必要がある。



写真9 巨大な石同士の隙間から内部に入った様子



写真10 駐車場

三 福州神社

(調査日：2013年8月23日)

1 事前調査

福州神社は、1936（昭和11）年11月3日に設立を許可され、天照大神、明治天皇、能久親王を祭神とする。所在地は「福州南台蒼前山」となっている。

福州神社については戦前の地図中で確認することができ（図5）、ほかに旧居留民館館長の信國鵬介氏の娘である笹子青子氏による『中国へのノスタルジ



図5 福州神社戦前地図。○で囲んだところに「福州神社」「日本小学」が見える

ア：戦時下の福州と広東⁽¹⁷⁾』に、「一九三五年（昭和十年）には、総領事館や居留民の希望に応え、父が中心になって有志を募り日本人小学校の近くに大きな鳥居のある立派な福州神社を完成させた。これは居留民の心のよりどころとなり、皆に喜ばれた」と、「日本人小学校」近くに建てられたという記述があった。しかし、具体的な場所を現在の地図で特定することが難しく、今回の調査中最も苦労した神社である。

2 福州市の概要

福州市は、閩江下流に位置する港湾都市である。

唐代の725年、福州都督府が設置され、福州の名が固まる。唐末には閩国が建国され、福州に都した。五代十国の一つであり、海外貿易などで発展した。

明代には福州に市舶司が置かれ、朝貢国である琉球王国の指定入港地となり、琉球館が置かれる。明清時代は福建の中心であった。

アヘン戦争後の南京条約で対外開港し、この蒼前山附近には、多くの外国領事館が建てられ日本の総領事館もここに置かれた。

日本軍は1941（昭和16）年4月に占領している。

3 現地調査の結果

8月23日、新幹線にて廈門市から福州市へ向かい、福州神社があったと思われる辺りの調査を行った。

戦前の地図と現在の地図及び航空写真を照合して、路の名前からアプローチしようと試みたが、遺構らしきものも見当たらず、その辺りに住む老人も「神社は知らない」とのことで、容易には判らなかった。

戦前の地図から、もしかすると「日本人小学校」や「総領事館」があったのではと考えられた場所には、現在軍人の子弟が通う「福州市倉山小学」校が建てられていた。幸いにも職員の方に尋ねることができ、「日本人小学校」がその場所に存在したという証言を得られた。恐らくは、その小学校の敷地辺りに福州神社が建てられていたのだろう（写真11、12）。



写真11 福州市倉山小学



写真12 福州市倉山小学付近



図6 福州市倉山小学辺地図（Google Map）

その辺りは現在「福州市倉山区」に相当し、倉山小学の住所は福建省福州市倉山区立新路25である（図6）。

なお、福州神社は日本軍が占領する1941（昭和16）年よりも前の1936（昭和11）年に創られている。これまで見てきた汕頭神社、廈門神社が占領後に創られたのと異なり、笹子氏の著書にもあるように、日本の居留民が日本人居留地に建てたものである。

おわりに

以上、旧中華民国の南部に建てられ、また北白川宮能久親王を祀る3つの神社跡地の調査結果について見てきた。旧中華民国に建てられた神社は1915年3月の台東鎮神社（青島）を皮切りに51の神社が建てられたが、当初は開港場や租界といった日本人居留地域に建てられた。今回我々が訪れた福州神社もその一つである。しかし、多くの神社が建てられるようになったのは、いうまでもなく1937年の日中戦争開始に伴う、日本軍の占領地の拡大以後であり、とりわけ1940年以降急増する（51社中35社と約7割⁽¹⁸⁾）。廈門神社や汕頭神社はそうした神社である。

尚、旧中華民国の神社は朝鮮総督府や樺太庁といった日本帝国の現地政府の認可で建てられたのではなく、当該地域の居留民会の願を管轄する領事館に届け出、日本の外務省が認可するという形をとっていた。もちろん、居留民会の願いといっても旧中華民国の占領地は軍隊によって維持されていたから、軍の直接・間接の支援があって初めて可能であった

のである。

今回調査した3つの神社にとどまることではないが、旧中華民国に建てられた神社が具体的にどのような過程を経て建てられたのか、またそうした神社跡地が日本の敗戦後、どのような経過を経て現在にいたっているのか、今後とも調査を積み重ねていきたい。

謝辞

最後になりましたが、今調査において、3社についての情報をご指示下さった稲宮康人氏（写真家・

非文字資料研究センター第3班「海外神社跡地から見た景観の持続と変容」研究班研究協力者）、汕頭市文化館にてご多忙のところまったく突然の訪問であったにもかかわらず快く対応して下さい、非常に貴重なお話と資料をご提供下さった庄慶生館長、李湘雄主任、福州にて自動車での移動と訪問施設への案内、神社跡地調査を共に行って下さった福州飛洋日本語学校董事長の羅利君先生に、心より感謝申し上げます。また、本稿報筆にあたり、ご指導、ご協力下さいました先生方、皆様に、厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

【註】

- (1) 神奈川大学法学研究所『研究年報』20号、2002年3月
- (2) 中島三千男『海外神社跡地の景観変容—さまざまな現在』（神奈川大学21世紀COE研究成果叢書—神奈川大学評論ブックレット、2013年、御茶の水書房）を参照
- (3) 中島前掲書及び、橘川俊忠「新郷・徐州・南京神社跡地現地調査報告」（神奈川大学非文字資料研究センターNews Letter「非文字資料研究」31号、2014年1月31日）
- (4) 「終戦前の海外神社一覧」（『神道史大辞典』園田稔・橋本政宣編、2004年、吉川弘文館の巻末付表）
- (5) 神奈川大学非文字資料研究センター「海外神社（跡地）に関するデータベース」（URL <http://www.himoji.jp/himoji/database/db04/>）
- (6) 註1論文参照
- (7) 註4論文参照
- (8) 「中華民国主要都市在留本邦人人口概計表」、アジア歴史資料センターRef. A06031020500、週報（国立公文書館）「在支邦人の保護」
- (9) 註4論文参照
- (10) いずれのブログも原文は簡体字
尋找舊汕頭『尋找舊汕頭的部落格』「历史急待拯救——“汕头神社”的最后遗存！」
（2009年2月26日、URL http://blog.sina.com.cn/s/blog_5c5727350100cb1q.html）
稞條『稞條的日記』「沉默中的消失」
（2009年4月11日、URL <http://www.douban.com/note/30863790/>）
- (11) 2011年、新加坡潮州八邑会馆出版（URL <http://chaoshanonline.com/Swatow/>）。掲載の古写真を閲覧できる。原文は簡体字。陳傳忠編『汕頭舊影』。
- (12) 汕頭市文化館HP（URL <http://www.gdstwhg.com/>）
- (13) 汕頭市文化館編『文化走廊』《文化走廊》編集部出版、2013年6月
- (14) 蘇（苏）音「一ヶ畝待保護與開發的歷史遺跡」（註13館報所収、P.28~29）調査後に分かったことだが、広東省の地元紙『羊城晚報』2013年7月25日付で、この記事と同じ内容のものが紹介されている。
URLは以下の通り。
http://www.ycwb.com/ePaper/ycwbdfb/html/2013-07/25/content_210732.htm?div=-1#
「不応（应）消逝的文化記（记）号：汕頭（头）老建築（筑）」
なお、事前調査で確認した2つのブログ記事もそれぞれ記事発表年に地元新聞が取り上げている。
- (15) 地図資料編集会編『近代中国都市地図集成』1986年、柏書房、「22 厦門（1938年）」の地図を加工
- (16) 註15の地図集成より、「21 福州（1938年）」の地図を加工
- (17) 2006年、文芸社。記述はP.40にある。
- (18) 註1論文参照
- (19) 註1論文参照

※註のURLはそれぞれ2014年5月現在のもの